

三保通信

今号ではこの巻頭にて、「製品値上げのお願い」をさせて頂きまことお許し願います。

実は以前1983年の11月号でも巻頭にてお願いをさせて頂いたことがあります。

今回もそうですが、スイマグご利用のお客様には大きなご負担増になります。それでも、止むに止まれず、巻頭に書かせて頂いてもお願いしなければとの思いからです。

弊社、小冊子『土と腸』でも書かせていただいているように日本いや世界一小さい製薬メーカーかと思えます。しかし小さいが故にできることもあると製造・販売を続けさせて頂いてきました。しかし小さくてもコスト負担は変わらない、いやこだわるが故にコストはかかってしま

21. 3. 1

〒424-0401

(株) 三保製薬研究所
静岡市清水区中河内一五二三
☎054-396-3321

うというのも現実です。

予防に貢献できるという希望を胸に事業を継続させて頂いてまいりました。とくに西式健康法など、予防法を実践される方々が弊社製品をお使い下さってまいりました。そして時代は正に今こそ予防の時代だと確

“あらかじめ” することの方法
希望と「お願い」

信しております。しかし、予防こそ中々その実践は難しいのも確かでしょう。

病気になってからでは、実は本当に大変なのです。遅いとは云いませんが、治療法は限られてくるのです。今や国民医療費は高騰し、パンク同然、これからの使い道は病気には使えな

いようにしたいという懐（ふところ）事情なのです。

それでは何に使えるのか、健康保険が使えるのも一に妊娠、二に出産、三に予防が来ると言われるくらい時代は動いているのです。予防にお金は使えない、出来るだけ掛からない、そうでありたい、同様にスイマグもそうでありたいと思つてまいりました。そして、最終的には治療ではなくて予防が選択されるとの希望と確信を持つて参りました。

そのために、弊社としてはマイナス腸活、つまり“食べるよりは出せ”を実践して頂くために、排泄の流れをつくるお手伝いを続けるための努力をさせて頂きたいと思っております。

痛みではなく、本来の命の在り方に気づくために、“予防のための排泄事業”を、皆さんのご協力を頂きながら継続したいと願っております。

三保製薬研究所社長 花澤久元

追悼 越智光親様

弊紙三保通信の「永年の友」、越智光親さんが100歳で亡くなられました。

亡くなられたことをご子息・康夫様がお手紙と共にご連絡（昨年未）下さりお教え頂きました。

お手紙本文と追伸の転載をお許し頂いて、そして1997年3月号に掲載させて頂いた越智さんの「寄稿文」をご紹介して、通信発行の度ごとに頂いたお葉書での「励ましの言葉」に感謝の気持ちをとお捧げすると共に越智さんのご冥福をお祈りしたいと思います。

（花澤）

貴社、ますますご繁栄のことお慶び申し上げます。師走に入り、何かとお忙しい季節になってきました。

さて、私の父は、肺気腫となり酸素吸入して10年近く人一倍健康に

気を付けていました。貴社の「三保通信」を楽しみにしていました。6月12日に老齢の為、天寿を全うし2年前に亡くなった母のもとに旅立ちました。

今回の、コロナ禍で4月から、子供3人と月のうち交代で帰省し、役所や銀行など小回りのことをしていました。愛媛県からの要請で、社会福祉協議会から帰省するのを中断するように指示が出ました。（子供は、男ばかりの3人です）

このため帰省できなくなりました。父には寂しい思いをさせたいと思います。

100歳を4月1日に迎え、父は103歳までは生きたいと申し出ていたが、子供が帰省できなくなってしまうので、急に元気がなくなりました。子供に会えるのを楽しみに気力を繋いでいたものと思います。

耳が遠いのに補聴器が嫌いで、電話での受け答えもできず、筆談中心

でいましたのに、。

しかし最後は父の希望通り、自宅で看護師に看取られ、極楽に旅立ちました。

三保製葉様には、いろいろお世話になりました。お礼申し上げます。貴社、健康での支援とますますのご発展をお祈りいたします。

2020年12月吉日

越智康夫

追伸

今まで父に対して親切なご対応感謝にたえませんが、あらためてお礼申し上げます。「三保通信」大切に取扱っていました。生甲斐となっていたような気がいたします。ありがとうございます。

寄稿文 健康一番 越智光親

本日、三保通信一月号受領しました。有難く拝読、残り二部は千葉県成東町の知人と県内宇和島の親友にそれぞれ送らせて（3面上段）

(2面下段より) 戴きました。

私も今年、喜寿を迎え健康維持には人一倍気を使っています。午前中はゲートボール(地元のゲートボールの事務局をしています)。午後は無農薬の野菜作りに精を出しています。野菜作りも、おいしい作物を目ざし、土作り三年、漸く、市販にならない味が収穫できるようになりました。

今年の正月は、二、三男一家が同日に帰り、来て嬉し、帰って嬉しと、賑やかな正月でした。恒例の書初め、三日に一同が書いて、帰郷できない長男宅へ速達で発送、四日に受け取った長男一家が直ちに記入して六日に全員の分が揃いました。大人は年々字が下手になると引替え、孫は上達しているのに驚かされます。

昨年もフルムーンを利用して旅行をしました。今年も十六日東京・十七日千葉県・十八、十九日東京、二十日京都へ出て五日間の旅を

予定しています。

寒さはこれから、健康一番、皆さ

文 稿 考
健康一番
越智 光親
まの益々のご発展
を祈念致します。

マイナス腸活フィットネスの動画
を作成中です!!

今やデジタル薬と言うのだそうです。デジタル技術(動画配信)を導入して医薬品の効果をより促すというもので、西式健康法の4つの体操を基本にフィットネス(健康のための運動)にしました。



実演はベリーダンスフィットネスの主宰者であり、マイナス腸活の良き理解者となつて頂いている杉谷知香さんです。

完成を楽しみにお待ちしております。幸いです。(H)

『マイナス腸活・7つの習慣』
冊子をお届けいたします!!



「マイナス腸活・7つの習慣」とは、「大腸のおそうじによる、腸内腐敗の予防・改善」をさらに推しすすめて、「免疫力による、病原体のおそうじ」、「オートファジーによる、細胞のおそうじ」そして「ケトシスによる、脂肪と有害物質のおそうじ」、「運動と休息(快眠)、笑顔による、脳内のおそうじ」の複合的デトックス効果によって「内側からキレイ、心と体が細胞レベルで蘇る」生活習慣を啓蒙するものです。

準備が出来次第順次、製品に同梱してお届けする予定です。

「心身の美と健康を維持、または健康な状態に戻す」お手伝いに、少しでもお役立て頂ければ幸いです。

小山内めぐみさんからのお便り

『通信』令和三年元旦号拝受。
ありがとうございます！

改めておめでとうございます……
と言いたいところですが、実は昨年、
越智さんのご家族から「父、越智
光親が六月十二日に百一歳で永眠
いたしました」という喪中葉書をい
ただき非常に驚かされました。

お元気に『通信』を読んでもらっしや
るとばかり信じていたので残念です
が、あちらでも『通信』を楽しん
で我々を見守って下さることによ
う。ご冥福をお祈りするばかりで
す。

変わつて、一月に九五歳になる我
が父は健在ですが、昨年暮れに室
内で転び、肋骨四本も折りました。
転んだ当初は折つてるとは思いもよ
りませんでした。夜中から翌朝ま
で痛がるので救急車を呼び、検診を
受けてる北部に搬送され判明した

のです。同日午後には、内科の検
診も受け、血液検査では、炎症が
起きている数値が高いことも分かり
ました。三週間は痛むというので整
形外科から痛み止めの薬を処方さ
れましたが、前に引用したように、
痛み止めの薬は、体が治そうとし
ている行為を止めてしまうだけです
から、父自身も「飲まない」と言
うので、一切服用しませんでした。
一週間後に内科で、また血液検
査をしたら、痛みを耐えたおかげ
か、ちゃんと炎症を示す数値が下
がっており、医者も驚いていました。
生物に備わった治癒力はたいしたも
のです。

父のような高齢でも、ちゃんと回
復するのですから、現代人の浅知
恵で痛み止めなんぞ服用すること
が、如何に愚かしいか、父の例で
も分かりますね。

何しろ、相変わらず、父は、毎日
快便！この腸が健全に機能している

ということが、治癒力のポイントで
はないでしょうか。

因みに、救急搬送された時に、
父は例のPCR検査を受けさせら
れ、陰性が判明しています。やはり、
コロナ対策にとつても腸の健康が鍵で
しょう。

で、腸自体の健全性については、
「腹の健康」連載に任せるとして、
この我々の健康を証明する「うんこ」
について考えてみたいと思つたら、
『ウンコはどこから来て、どこへ行く
のか？—人糞地理学—』
(湯澤規子)という興味深い本に出
会いました。



ここには、これまでのウンコや便所の
歴史、見方の変遷が述べられていま
す。
(5面上段へ)

(4面下段より) そうです、今でこそ、水洗トイレが当然ですが、かつては汲み取り式で、人糞を肥料として利用していたのですよね。

近世に多くの農書を著した大蔵永常が『農稼肥培論』に

「凡、農業の内にて最も大切にすべきものは、糞壤を撰ぶなり。是則ち天地の化育を助くべき内の一ツにして、百穀を世に充たしめて、以て万民の生養を厚くするの第一義なり。」

とあるそうなの。

この「糞壤」とは「肥えた土」ということで、土を肥えさせていたのが、実は人糞だったのです。かつて、都市近郊の農地の土は、都市人口の豊富な(笑)人糞によって肥えていたわけです。

そう言えば、かつて、中国では、豚小屋の上は人間のトイレで、落ちてくる人糞を豚はエサにして育ったそうですが、



©TENGYA BOOKSTORE

これと同様のことが、沖縄でもあったそうで、

「戦前の沖縄では、石積み用の便所と豚小屋が一緒になったフル(沖縄の昔のトイレ)がごく普通にどこにでも見られた。」

そうなの。

しかし、戦後、米国海軍群政府布令によって、衛生上の問題からトイレの改善指導が進められ、フルはなくなったそうです。

本来、人↓豚↓作物↓人という自然の生産サイクルが成り立っていたのに、不衛生という理由で、これが失われ、ウンコは一方的に水洗で一瞬にして目の前から消え去る排除されるだけのもの変わってしまったのです。

だから、

「かつて糞尿が下肥として利用していた時代と比べて、私たちが食べるもの、トイレや台所から下水道に流すものの中には、様々な物質が混入するようになった。」

……私たちの暮らしが便利になればなるほど、再利用することが難しい汚泥ばかりが増え続けることになるのである。

……ウンコがかつてのように農地に還れなくなったのは、ウンコが「汚い」からなのではなく、私たち自身がウンコに含まれる物質を変化させてきたせいなのである。そして、便利な暮らしに慣れきってしまった私たちは、ウンコから目を背けるようになり、ウンコがどこへ行くのかわからない、想像することを忘れてしまった。」

というわけです。そして、常に除菌抗菌滅菌無菌を目指したあげくが、コロナ禍ですからなあ。

果たして、かつて、人糞を利用してきた時代より、現代は清潔になったと言えるのでしょうか。トイレでゆっくり考えるのもいいかもしれませぬ。

本年も、腸の健康のために、スィマグ提供をよろしくお願いします。

小山内めぐみ

